俳句同好会

世話人　石崎陵南

社団法人京都電業協会の俳句同好会も発足して回を重ねて、第百三十三回を開催する事ができました。

長らくご指導を頂いておりました久保白楊さんを失いましたが、白楊さんの「ひとりでもよし、仲間と学べばなお楽し」の教えを今後も続けたいと思っています。初心者を含め入会をお待ちしています。

第百二十六回　平成十六年一月二十二日（木）

兼題　『年末、年始』と当季雑詠とし、吟行は取り止めました。

句座　「京新山」（新橋通川端東入ル）にて

兼題句

おしゃべりと　食べるが先か　初句会　宮本
煤逃げと　いふ事知りぬ　転引きて　白楊
畔をまだ　隠さぬ程の　一夜雪　紫杏
添書も　なくて息災　賀状かな　一義
日の入りが　すこし遅れて　小正月　下里
冬帽子　似合わぬままに　老早し　一義
新春や　折目のついた　日章旗　下里
わが机　のみ片付かず　去年今年　白楊
咳多き　人にまじりて　初詣　宮本
大寒は　一日遅れ　京冴ゆる　陵南
冬晴の　続き捗る　庭手入　陵南
群青の　明け方の空　月冴ゆる　紫杏

第百二十七回　平成十六年三月十二日（金）

兼題　『春隣り』『梅』『水温む』『雛祭に関するもの』と当季雑詠

吟行　京都御苑の梅林

句座　「京料理花ごよみ」蛤御門前京都ガーデンパレス内

兼題句

花の種　あれやこれやに　水温む　陵南
こぼれ出し　去年のあられか　雛飾る　白楊
水ぬるむ　飛火野日溜り　鹿溜り　紫杏
鴻毛の　身を永らへて　春隣　紫杏
春隣り　猫に欠伸を　移しけり　一義
雛の間に　寝るはめとなる　爺さまかな　白楊
日差し増し　飛郷の気配　ゆりかもめ　宮本

吟行句

梅林の　カンバスここと　決めて据え　白楊
咲く梅も　気品ほの見え　京御苑　下里
梅を出て　句座はいささか　昼の酒　一義
満開の　花ごよみてふ　今日の句座　紫杏

第百二十八回　平成十六年四月十三日（火）

兼題　『蛍烏賊』『草餅、蕨餅』『霞、朧』『四月馬鹿』と当季雑詠

吟行　加茂川（北山大橋～北大路橋間）の東側堤遅咲きの半木の道の桜観賞

句座　堤に莫蓙を敷き花見弁当で

兼題句

草餅を　仏だん供え　ぐちこほす　宮本
騙されて　気ずかぬふりを　四月馬鹿　宮本
（以上二句満票でした。上達されました）
夕靄を　あわく色染め　山桜　下里
ひとけなき　京の路地奥　月朧　陵南
朧より　朧へ一節　謡ひゆく　白楊
喜寿すぎて　うかつにのりし　四月馬鹿　一義
蛍烏賊　小升で花烏賊　数で売る　白楊

吟行句

老ひたれと　しゃんと歩まむ　花の下　紫杏
棚一つ　一つに風情　加茂桜　白楊
右岸散り　左岸満開　加茂桜　陵南
加茂川の　花に酔う人　人人人　三木
句行脚の　果は川原の　花の下　紫杏
花は葉に　静かに刻を　移しおり　一義
紅しだれ　ここも半木　通り抜け　一義

第百二十九回　平成十六年五月十九日（水）

兼題　『初夏』『牡丹』『筍』『夏場所』『豆飯』と
当季雑詠
吟行　正伝寺（北区西加茂北鎮守菴）
句座　「花ごよみ」

兼題句

水張りし　田植待つ田の　続きけり　紫杏
五月場所　異國力士の　多きかな　陵南
雨となる　剪定鋏の　研ぎ上る　下里
筍や　幼な子引摺る　程の苞（つと）　白楊
二日目の　窯の火の色　立夏かな　白楊
造花には　あらず一ひら　牡丹散る　白楊
下手くそに　掘られ筍　盗まるる　白楊
（白楊さんの病院からの投句です）

吟行句

借景の　比叡は新緑　正伝寺　紫杏
走り梅雨　遠き戦の　血天井　一義
走り梅雨　借景比叡を　かくしけり　紫杏

第百三十回　平成十六年六月二十九日（火）

兼題　『短夜』『父の日』『鰻』『玉葱』『蚊』と
当季雑詠
吟行　竜安寺の石庭と鏡容池
句座　「京新山」

兼題句

陽に干した　使い残しの　蚊遺香　下里
玉葱は　妻領分の　裏庭に　紫杏
短夜の　筈を病室　明け難し　白楊
玉葱を　極く薄切りと　庖丁研ぐ　白楊
（白楊さん最後の句です）

吟行句

観音の　千のおん手に　団扇なく　紫杏
石庭の　裏に静けき　苔の庭　下里
蹲踞（つくばい）に　「足るを知り」得て　半夏生　一義
びっしりと　睡蓮咲くや　鏡容池　陵南

第百三十一回　平成十六年八月二十七日（金）

兼題　『残暑』『焼酎』『秋の七草のいずれか』と
当季雑詠
吟行　聖護院門跡
句座　「聖護院御殿荘」

兼題句

夏雲に　乗り旅立ちし　俳句の師　下里
浮雲の　一つ残して　残暑かな　陵南
生ける証（あかし）　申（さる）年の梅　漬ける妻　紫杏
書に倦（う）みて　目をやる庭の　藤袴　陵南
盆近し　袈裟の姿を　バイクに見　宮本
雑草の　中にひる顔　散歩道　陵南
佛飯を　下げて餌とする　夏雀　紫杏
破船に　服干す子らに　残暑かな　下里
話すこと　なくて虫聞く　老二人　紫杏
何をしに　来たのか忘れ　秋暑し　紫杏
日焼け止メ　塗りし気持は　秋思う　宮本

吟行句

八っ橋の　いわれは知らず　葉月尽（じん）　一義

紅葉を　水面(みなも)にうつして　心字池　陵南

第百三十二回　平成十六年九月二十八日（火）

兼題　『月』『秋刀魚』『とんぼ』『梨』と当季雑詠

吟行　壬生寺、八木邸他（新撰組関係）

句座　「がんこ高瀬川二条苑」

兼題句

お仕置に　萩はひととこ　括(くく)られし　紫杏
落梨を　一盛で買う　一過晴　下里
赤とんぼ　棒の天辺(てっぺん)　占領す　紫杏
店頭の　最前列に　初秋刀魚　陵南
焦げ秋刀魚　頭に大根　おろしかな　陵南
秋刀魚焼く　匂いに起きて　猫の伸び　宮本
百日紅　まだ踏ん張って　赤と白　紫杏
竹林に　白彼岸花　見つけたり　陵南
台風の　それて安堵の　雨戸開け　紫杏
銭湯の　天窓越しの　月見かな　下里
墓参り　いつもの道に　彼岸花　宮本
連ドラに　涙すすりつ　梨を喰(は)み　一義

吟行句

石佛の　群れて整列　秋暑し　紫杏
武士(もののふ)に　生命(いのち)をかけし　萩の塚　一義
見上ぐれは　千体仏塔　秋空に　陵南

第百三十三回　平成十六年十一月十二日（金）

兼題　『霜』『爽やか』季語を入れて『道』『門』と当季雑詠

吟行　等持院と京都市考古資料舘

句座　「民芸茶屋千都」

兼題句

田仕舞の　籾(もみ)焼く煙　真直(まっすぐ)に　紫杏
音もなく　打重なりぬ　照もみじ　三木
朝一番　初霜ふみて　遊歩道　陵南
里山の　道は土道　木守柿　紫杏
爽やかに　五日残して　喜寿終る　陵南
歩道橋　小雨夕霧　塾通ひ　紫杏

吟行句

台風の　すぎたる夜の　七夜月　下里
本廟へ　道は曲りて　秋深し　三木
辻奥は　薄紅葉の　等持院　下里

俳句同好会参加者

㈱デリブ　林　治吉
光星電工㈱　久保　白楊
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
宮本電気工事㈱　宮本みつへ
川鉄電設㈱　下里　尚信
㈱トモエ屋　星野　紫杏

ゲスト参加

職別国保　三木　一義

故人

光星電工㈱　久保　白楊

平成十七年一月
協会広報誌　第三十八号掲載

俳句同好会

世話人　石崎陵南

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百四十一回を開催する事ができました。

現在会員六名で吟行、句座をいたしております。

初心者を含め入会をお待ちしています。

第百三十四回　平成十七年一月二十八日（金）

兼題　『年末、年始に関する句』と当季雑詠

吟行は取り止めました。

句座　「京新山」（新橋通川端東入ル）にて

兼題句

初鏡　白一色の　髪となる　紫杏

破れ凧　昨日も今日も　枝の先き　下里

而うして　新年御慶　老二人　一義

常の景　なれど家並も　淑気なる　一義

妻忘れ　一日遅れの　小豆粥　陵南

初句会　一つ年取り　顔揃う　宮本

大寒や　庭師手袋　重ねおり　陵南

値引して　初弘法に　売る暦　紫杏

しめ縄の　飾り稲穂に　むれ雀　下里

初荷かや　長距離便の　よごれ雪　紫杏

ともかくも　仲間揃いぬ　初句会　一義

第百三十五回　平成十七年三月十一日（金）

兼題　『春雨』『雲雀』『木の芽』と当季雑詠

吟行　北野天満宮の梅林

句座　「花ごよみ」京都御所蛤御門前

兼題句

雲雀鳴き　上を仰いで　深呼吸　宮本

立春や　比叡に向う　鳥柱　陵南

節分や　福とてなけれど　鬼も来ず　下里

にくらしや　すそに気をやる　春一番　宮本

三分咲き　なれど坪庭　梅かおる　陵南

雑草も　同じ芽吹きに　まゆひそめ　下里

待合室　テレビ音なく　春の雨　紫杏

義経の　史跡を巡る　京の春　陵南

吟行句

爺同志　相合傘の　梅見かな　一義

第百三十六回　平成十七年四月二十二日（金）

兼題　『朧月』『草餅』『子猫』『新緑』と当季雑詠

吟行　仁和寺の御室桜観賞

句座　仁和寺内御室会館

兼題句

草もちに　願いをこめて　供えけり　宮本

若葉寒　下着長袖　出しにけり　陵南

池の面に　ようやく組めし　花筏　下里

縦縞の　天気図またも　春嵐　紫杏

山頂を　残して比叡　新緑に　紫杏

名店街　我れは草餅　妻ケーキ　陵南

お日柄も　よしと子猫を　貰いけり　一義

捨て子猫　おりて園児の　列乱る　陵南

吟行句

花見酒　手話のしゃべくり　尽もせず　紫杏

水煙を　空にとどめて　花の塔　一義

第百三十七回　平成十七年五月二十五日（水）

兼題　『更衣』『牡丹』『穴子』『五月』と
　　当季雑詠

吟行　松尾大社

句座　「サンメンバーズ京都嵯峨」
　　（林会員の近くにて）

兼題句

庭に舞ふ　初蝶空に　消えにけり　林

更衣　虫除けそえて　仕舞けり　宮本

二の腕の　白さまぶしき　更衣　陵南

一輪の　牡丹魅せられ　鉢を買う　宮本

吟行句

最古なる　酒の社に　若葉風　一義

奉献の　酒樽いくつ　五月尽（じん）　一義

第百三十八回　平成十七年六月二十三日（木）

兼題　『父の日』『さくらんぼ』『杜若』『夏衣』
　　『蚊』と当季雑詠

吟行　黄檗山万福寺と三室戸寺の紫陽花
　　（三室戸寺の紫陽花艶やかで見事でした。）

句座　「くれたけ庵」京阪中書島駅近く

兼題句

八重山に　夏を先取る　旅の朝　下里

父の日の　供華は娘の　見立てなる　宮本

水彩の　如き軽さや　初夏の雲　紫杏

父の日や　自戒（かい）はみだす　昼の酒　一義

ループタイ　緩めにかけて　夏隣　紫杏

もてなしは　濃いめの渋茶　柏餅　紫杏

国産は　久（ひさ）にあたらず　さくらんぼ　一義

吟行句

夏至（げし）すぎの　鳴らぬ魚板（かいばん）　万福寺　下里

紫陽花は　地蔵囲みて　ひかえおり　陵南

一山を　埋づめ紫陽花　彩（あや）競い　一義

第百三十九回　平成十七年八月二十五日（木）

兼題　（七月分）『百合』『夕立』『日傘』『昼寝』
　　（八月分）『盆の月』『南瓜』『朝顔』
　　『送火』と当季雑詠

句座　「京新山」　吟行は取り止め

兼題句

耳鳴に　重ねて今朝は　蝉の鳴く　紫杏

追い抜きし　日傘の中は　媼なり　一義

山百合の　群落消えて　重機あと　下里

高々と　ざるの素麺　すくいけり　紫杏

俯（うつ）向きし　百合を支えて　芯を嗅ぎ　一義

一人昼　佃煮茄子漬　冷番茶　紫杏

うどん屋の　造花朝顔　青竹に　宮本

山百合や　一日五便の　バス通る　陵南

一茎（いっけい）の　百合俗塵を　払うごと　一義

芋粥の　朝飼　八月十五日　紫杏

袈裟衣　風になびかせ　盆の月　宮本

日傘さし　神水受ける　媼（おうな）かな　陵南

第百四十回　平成十七年九月二十八日（水）

兼題　『秋の朝』『太刀魚』『菊日和』『栗』『虫』
　　と当季雑詠

吟行　青蓮院門跡の予定　先方都合により栗田
　　神社とおおくすの庭に変更

句座　「かに家」八坂神社前

兼題句

栗を剥ぐ　八十路すぐそこ　昼一人　一義
うたた寝の　夢より醒めたり　涼しさに　紫杏
まだ生きる　つもりで今日も　むかご飯　紫杏
一日の　陽を飲み込みし　酔芙蓉　紫杏
台風の　終夜放送　秋近し　宮本
秋の夜や　虫食い川柳　答え出ず　陵南
闇近し　無為の一日や　虫時雨　一義
虫の音を　たどれば土間の　下駄の下　陵南
秋暑し　へそ出しルック　ボロGパン　紫杏
ためらいに　血圧はかる　秋の朝　下里
くさめして　のびで始まる　秋の朝　陵南
晩酌も　今日より焼酎　湯割とす　宮本
浴室の　小窓あければ　虫時雨

吟行句

五線の塀　続く門跡　今朝の秋　一義
幾世経し　大楠木や　今朝の秋　一義
見上げたる　楠の大樹や　天高し　陵南

第百四十一回　平成十七年十一月十八日（金）

兼題　（十月分）『きのこ』『渡り鳥』『朝寒』『駅』
　　（十一月分）『山茶花』『文化の日』『寄鍋』
　　と当季雑詠

吟行　永観堂南禅寺の紅葉観賞

句座　「京新山」

兼題句

寄鍋や　男同志の　艶話　一義
引く媼　引かれる犬も　甚平着て　紫杏
かけ着けし　駅朝寒に　引き締る　下里
髪と霜　得て今があり　猫背にて　紫杏
朝寒を　吐く息に知る　犬散歩　宮本
吾亦紅　あれも花なら　吾も花　紫杏
冬ざれや　昭和を守りし　駅無人　一義
猫も留守　吾持て余す　文化の日　一義
今年初　おでん三日目　味熟す　紫杏
乱れ萩　自在の風に　吹かれおり　陵南

吟行句

石路の　花の出迎え　永観堂　宮本
みかえりの　阿弥陀は燃ゆる　山を見る　陵南

俳句同好会参加者

㈱デリブ　林　治吉
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
宮本電気工事㈱　宮本みつへ
川鉄電設㈱　下里　尚信
㈱トモエ屋　星野　紫杏

ゲスト参加

職別国保　三木　一義

平成十八年一月
協会広報誌　第四十号掲載

俳句同好会

世話人　石崎陵南

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百四十八回を開催する事ができました。
現在会員六名で吟行、句座をいたしております。
初心者を含め入会をお待ちしています。

第百四十二回　平成十八年一月二十七日（金）

兼題　『冬ざれ』『マスク』『年末年始に関するもの』季語を入れて『風呂』『酒』と当季雑詠
吟行は取り止めました
句座　「かに家」（東山通四条下ル西側）

兼題句

元朝の　犬は新調　チャンチャンコ　三木
銭湯の　二日の朝は　酒におう　下里
マスク取り　我を忘れて　大欠伸　宮本
竹馬も　風も見ぬ世を　老いており　三木
寒鰤（ぶり）を　向う鉢巻　捌（さば）きけり　紫杏
碁仇の　現れぬ間の　初湯かな　三木
初場所や　風呂にいそぎし　負力士　下里
湯に浮ぶ　柚子を手玉に　取って見る　紫杏
冬ざれや　あき家の庭に　はぐれ猫　陵南
二重丸　どんど目出度く　天に果つ　三木
初詣　あなたまかせの　歩幅にて　紫杏
初競（せり）や　杉豪快に　二〇〇の木　三木
風呂タイル　冷えきり足が　前に出ず　宮本

第百四十三回　平成十八年三月三日（金）

兼題　『早春』『公魚』『猫柳』『菠薐草（ほうれん）』と季語を入れて『時計』と当季雑詠
吟行　酬恩庵一休寺
句座　「大扇」（近鉄京都線新田辺駅近く）

兼題句

待たされて　また時計見る　寒さかな　紫杏
春きざし　水車ごとりと　動き出し　三木
飛石に　一息つけば　やぶつばき　下里
生けられて　四温にふくらむ　猫柳　紫杏
親葉影（おやばかげ）　早も塔立つ　ホーレン草　下里
春一人　あり余りたる　大時計　紫杏
気がつけば　影の短き　時計台　宮本
遠目にも　芽ぶきの見ゆる　柳かな　下里
鈴の音と　浦安の舞　初の午　紫杏
口笛の　音色のかたし　早春譜　下里
猫柳　十石舟の　川巡り　陵南
日時計の　影もへたりて　なごり雪　下里
この齢で　急（せ）くなあせるな　春隣　紫杏

吟行句

方丈の　砂に陽こぼれ　梅小ふむ　三木
納豆に　季語見つからず　一休寺　三木

第百四十四回　平成十八年四月十四日（金）

兼題　『花曇』『春眠』『菜の花』季語を入れて
　　『貝類』『屋根』と当季雑詠
吟行　大徳寺
句座　「萬重」（西陣の料亭）

兼題句

名残雪　つけて散りゆく　梅の花　　治吉
菜の花が　もう一品の　幕の内　　下里
焚かずとも　集めし落葉　朽ちる春　　紫杏
遅霜が　朝日で縞に　瓦屋根　　下里
花曇り　仁王の肩の　薄ほこり　　陵南
滝のごと　枝垂桜に　感銘す　　三木
お水取り　過ぎて雪降る　伊達薄着　　宮本
長閑なり　ガレージ屋根に　猫眠る　　陵南
屋根越えて　風に乗り来し　花吹雪　　紫杏

第百四十五回　平成十八年六月十四日（水）

兼題　『青葉』『短夜』『筍』『母の日』季語を
　　入れて『樋』と当季雑詠
吟行　無鄰庵（南禅寺近くの名庭）
句座　日本料理「あと村」（木屋町四条下ル）

兼題句

薪で炊く　筍飯の　味深し　　紫杏
無人駅　若竹すくと　伸びにけり　　陵南
山々の　若葉まだら模様に萌え　　宮本
終の一皮　脱ぎ終えし　今年竹　　三木
母の味　まねて焼なす　胡麻あえに　　紫杏
被せ藁に　初筍楚々と　顔を出し　　三木
樋かかる　くもの糸光る　ひとしずく　　宮本
老筍が　合羽にも似て　皮からげ　　三木
まだ日射し　二階に残る　青葉風　　下里
横走る　樋の下露　走り梅雨　　紫杏
にわか雨　花の流れる　古き樋　　陵南

吟行句

万緑に　陽の斑こぼれて　無鄰庵　　三木
名園の　大樟梢の　青葉かな　　陵南

第百四十六回　平成十八年八月二十九日（火）

兼題　『満月』『夕立』『夜店』『朝顔』『鰻』
　　『梅酒』『向日葵』『やぶいり』季語を
　　入れて『下駄』と当季雑詠
　　吟行は取り止めました
句座　「かに家」（東山通四条下ル西側）

兼題句

朝顔に　つられて早起き　花一輪　　宮本
大夕立　大安吉日　差別なく　　三木
夏帽子　外反母指の　下駄散歩　　陵南
捨船は　浜昼顔の　一人占め　　下里
夕立に　戻りし猫の　武者ぶるい　　三木
薄墨の　大煙幕や　夕立くる　　三木
せみしぐれ　ラジオ体操　一二三　　下里
満月を　さえ貪ぼりて　ビルの群　　三木
己が彩　告げて朝顔　刻を生く　　三木
なき母の　下駄の鼻緒に　うすら黴　　下里
吾が胸に　何思うてか　狂い蝉　　三木

第百四十七回　平成十八年十月十九日（木）

兼題　『秋の夜』『萩』『鈴虫』『芋』『鰯』『新米』『梨』『松手入』『秋時雨』季語を入れて『電車』『時計』と当季雑詠

吟行　豊国神社、方広寺、耳塚（東山七条）

句座　「京新山」（新橋通り川端東入ル）

兼題句

窓を開け　鈴虫の声　まねき入れ　宮本

秋祭り　獅子舞頭に　子供乗せ　紫杏

とろろ昆布　まとう新米　にぎり飯　陵南

秋時雨　カンナの赤き　まだ残る　下里

さらさらと　米びつ満たす　今年米　紫杏

松手入れ　向う三軒　両どなり　下里

妻がいて　子がいて旨し（うま）　ふかし芋　紫杏

中天を　掃き大地掃き　萩の風　三木

吟行句

石垣に　萩の乱れや　五輪の塔　三木

第百四十八回　平成十八年十一月十八日（土）

兼題　『立冬』『文化の日』『落葉』『浅漬』『まぐろ』季語を入れて『火』『水』『石』と当季雑詠

吟行　青蓮院（神宮道三条下ル）

句座　「がんこ」髙瀬川二条苑（木屋町二条）

兼題句

雲水の　鼻緒をぬらす　今朝の露　紫杏

残照に　召（め）されゆくごと　落葉降る　三木

冬立つや　銭湯の窓　ゆげの幕　下里

夕日から　もらいし錦　柿落葉　下里

焼栗を　火から取り出す　熱さかな　宮本

来る雁（かり）を　せかす西風　雲早し　紫杏

吟行句

鐘一つ　青蓮院に　秋深し　宮本

朝寒むや　仏足石の　金象嵌（きんぞうがん）　陵南

俳句同好会参加者

㈱デリブ　林　治吉

㈱オリヂナル電設　石崎　陵南

宮本電気工事㈱　宮本みつへ

川鉄電設㈱　下里　尚信

㈱トモエ屋　星野　紫杏

ゲスト参加

職別国保　三木　一義

平成十九年一月
協会広報誌　第四十二号掲載